

INTERVIEW

自治医科大学 学長
永井良三先生



物語に寄り添うことのできる 医師に!

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

地域社会のリーダーたるためには

山田隆司(聞き手) 今日は自治医科大学に永井良三学長をお訪ねしました。永井先生には学長に就任された時にこのインタビューのコーナーでお話を伺いました。今回は改めてこれまでの大学での卒前教育の取り組みや、支部会などに出向かれ、卒業生の方向性などについてお考えになられたこと、また先生には協会が7月1日に開催する『第12回 へき地・地域医療学会 公開シンポジウム』のシンポジストとしてご登壇いただきますので、それについても少し伺えればと思います。

永井良三 自治医大の役割も時代とともに変わってきていると思います。中尾喜久学長の時代は「医療の谷間に灯をともしへき地医療を支える医師の育成」、高久史磨学長の時代は「総合医の育成」、

そして私はこれらの理念を踏まえた上で、「地域医療を通じて地域社会のリーダー」としても活躍してほしいと言っています。地域医療を提供する上では、住民だけでなく、行政や医師会、各種の医療職種の協力が必要です。その土地の歴史や文化、あるいは国全体の動向を知った上で、活動しないといけないわけです。どんな知識も何ひとつ無駄になることはない。トータルな教養の上に立って、地域医療を実践してほしいと願っています。その大前提になるのが、「人間が好き」ということですね。

それから自分で勉強する力が大事です。特に読み書きです。教員には、学生にレポートを書いてもらうようにしているのですが、それを見ていると早い学生、遅い学生がいます。遅くて

も真面目であり、いざとなったら頑張ればよいのです。しかし欠席が多く、かつ提出も遅い学生はかなりのリスクで進級できていません。自治医大の学生は、まず最低限きちんと国家試験を通らなければ現場に迷惑をかけます。1人不合格になれば、その県にとっては2人が1人になってしまうわけですから。

山田 おっしゃるとおりです。自治医大の場合、本当に1人の意味が大きいですよ。ましてやその地域にたった1人の医者ということになると、さらに逃れられない、自分だけが責任を負わなければならないといった状況に遭遇する場面も多々あります。そんなことから先生が言われるように学生さんには地域社会の中でリーダーとなれるような力を培っておいてほしいと思います。

永井 地域医療では、難しい問題に直面することがいろいろ多いと思います。そのときに自分を助けてくれる人脈、ネットワークがあることが大事だと思います。その人の周りに信頼のおける人材がいるかどうか。それは普段の行動、言動からつくられるものです。若い時から信頼を作る力を養ってほしいと思います。

山田 そうですね。しかし私もそうですが、学生時代にそれを十分培うまでに至らなかった卒業生も多いと思います。でも地域に居続ける、逃げないで仕事をせざるをえない状況にあると、ある程度の問題は自分で乗り越えられるようになる気がします。

永井 次第に力が付くのですね。

山田 そうなんですよ。そういう意味では、臨床医としての鍛錬には地域というのはいい環境ではないかと私は思っています。

永井 一方で、都会で働いていた専門医も、年齢と経験を重ねていくと、結局総合医になります。

山田 いろいろな経験値を積んでいくことによってジェネラルな能力が付いていくということですね。人生100年時代でもあるので、若い頃は専門医として働いていてもシニア世代になって、地域の総合診療を受け持つということも十分あると私は思います。地域で働く総合医が、一つの確立した分野として認められ、質の高い多様な人材が増えていくといいのではないかと思います。今、自治医大の1期生も65歳くらいになって、ちょうどそんなシニア世代になっています。

患者さんによく生きてもらえるように

永井 患者さんにかによく生きてもらうのが大事ですが、これが難しい。患者さんに納得してもらうためにはさまざまな面から支えないといけないわけですね。医師は若い時にはいろいろな勉強をしますが、最後はトータルに患者さんに寄り添って、患者さんが納得するような支援ができることが大事だと思います。もちろんその前にやるべき医療はやらないといけなければ

ども、患者さんの納得感はまた別の面がありませぬ。

山田 それは臨床医にとってベースであると同時に、究極の目標みたいなところですね。

永井 人生哲学の問題がありますね。哲学では存在とは何かを問うてきたわけですが、科学的にいろいろ説明できても、患者さんの存在感は別の問題です。最後は患者さんの物語が必要でしょ